

2年になって最初の中間試験が始まる日から丁度1週間前のことだった。すでに卒業したはずのハルアキ先輩からある一報が鳥班LINEに届いたのだ。「猿江の野球場にギンムクドリがいる。」私（会長選の演説でわしと言ってしまったので今回から私と書いてわしと読む）は食事中だったのにも関わらず、教室の中で「えっ!？」と叫んでしまった。それくらい驚きだったのだ。

それだけ驚くのには理由がある。ギンムクドリは日本ではとても珍しく、迷鳥と呼ばれる部類の鳥なのだ。迷鳥とはその字の通り、本来日本国内に生息しないはずが渡りの途中や台風などの影響で日本国内に迷い込んでくる鳥のことだ。本来日本で見られないだけに希少な存在であり、数十年に1度渡来するかもしれないかのレベルで、ネットなどに情報が出れば少なくとも100人、多い時には1万人以上の鳥屋がわざわざ見にくるほどの価値がある。また、学術的にも貴重な渡来例として記録される。東京23区では過去に2021～2022年冬季に新宿御苑に現れたロクショウヒタキなどが迷鳥として記録されている。そんな超～貴重な迷鳥が猿江に現れたのだ。そりゃあ教室の中だろうが発狂してしまう。

帰りのHRが終わった途端に私は教室を走って飛び出し、龍平先生に異物を見るような目で見られながら学校を後にした。そして、すぐに猿江についた。野球場には結構な数があるムクドリの群れができていた。そのなかにボツンと1羽。白っぽい個体が見えた。ギンムクドリのオスである。「おおおお!! 本当にいたぞ!!」と叫びながらカメラの電源を入れて連写しまくった。通行人から見たら誰もいない野球場に向かって屈みながらカメラを向けているおかしい奴がいると思われていただろうが、そんなことは知ったこっちゃない。

前に猿江でコムクドリを見た時もそうだったが、ムクドリ類の珍鳥は毎度毎度ムクドリの群れに混ざっている。普通種の群れでも珍鳥が混ざることがあるので要注意だ。というか普通にいる近縁種の群れがあると珍鳥はそこに混ざるのかもしれない。そういえばアメリカヒドリもヒドリガモの群れに混じっている。私は改めて普通種の大切さに気づくことができた。普通種がいるからこそ貴重種がやってくるのだ。

しばらく（といっても10分くらい）写真を撮ったり観察したりして、楽しんでいたらネットの上に飛び上がって群れのムクドリと共にどこかへ飛んでいってしまった。これが今回最初で最後のギンムクドリの観察となった。

その直後、鳥班新入りのマスブチと蟲班のソウシが私の元にやってきた。運の悪い奴らだ。たった十数秒前までいたのに彼らは見れなかったのだ。珍鳥との出会いは本当に運であり一期一会なのだ痛感した。この後マスブチに「テスト前に何やってんすか!？」と叱られた。私としてはここで見ておけばモヤモヤせずにテスト勉強できると思ったのだが。まだ彼は本物の鳥野郎になれていないようだ。

後日、ハルアキ先輩から「報文書いたら？」と連絡が来た。報文といえば、龍平先生がリュウキュウベニイトトンボで書いてたあれのことか。アマチュアながらも鳥類学をやっているものとして貴重な記録を報告しないわけにはいかない。なので私も今年のうちに報文を書いてみようと思う。



ギンムクドリ（オス）

ムクドリと違って翼などが灰色っぽく、頭が白いが、大きさはムクドリとほぼ同じである。今回渡来したのはこの1羽のみだ。



↑ムクドリとともに採食するギンムクドリ



↑ムクドリ（右側）とともに採食するコムクドリ（左側）

猿江には度々何百羽にもなるムクドリの大群ができるが、その中にムクドリ類の珍鳥が入る。このギンムクドリの数ヶ月後（7月）にはコムクドリ4羽の群れがこれに混じった。